



うたかたの恋

1月8日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月8日のおはなし「うたかたの恋」

「約束ですよ？」という声が遠くに聞こえ、自分の声が「わかった」と答えるのを他人事のように聞いた。目の前に置かれたグラスの中の液体はたちまち咲き乱れる花へと姿を変えて行った。花卉の鮮やかな山吹色と、まるく広い葉の緑がまるで蛍光色のように目を刺した。そう思った瞬間、刺された眼球の穴から液体が溢れ出し、それを飲み干した花がさまざまな色に変化して行く。山吹色の花卉が内側から紫に染まり、赤に染まり、紺色に染まり、檸檬色に染まる。同時に刻々と形も変化し、あるものは花卉の数を減らし、あるものは紫陽花のように小さな花々が群れてカタチをなす。

次から次へ突拍子がないことばかり起こるので、それが夢だということはすぐにわかった。だから色とりどりの花をそのまま身にまとい、花柄のワンピースに変えて彼女が登場した時も、もう驚かなかった。「螺旋階段なら用意できたわ」前からの約束のように彼女がいうので、つり込まれるように返事をしてしまった。「連れて行ってくれるかい」「たとえ命を落とそうとね」「あっはっはっはっは」最高の冗談を聞いたように大笑いする人がいるので誰かと思ったら自分だった。見下ろすとすぐそこを陽気に大笑いしながら自分が歩いて行く。凶々しく彼女の手を取り、つないだ手を大きく振り回しながら歩いて行く。

去って行く2人の後ろ姿を見ながら、あんな風にはしゃいでいるとじきに彼女に嫌われてしまうぞと思う。嫌われてしまえと思う心と、彼女に嫌われたくないと思う心が、居場所を争いながら結局ぼろぼろと両方ともはるか眼下に落ちて行く。気づくとずいぶん高いところまで来てしまった。傍らをフワフワとくらのようなものが通り過ぎて行き、初めて自分は海の底にいたのだということがわかる。だからこんな風に身体が浮き上がっても何の不思議もないのだ。とげがたくさん生えたカラフルな魚が近づいてきて、ぎょっとした顔つきでこっちを見たかと思うと、身を翻して逃げて行く。

取り巻く水全体が大きく揺らいだかと思うと前方に向かって動きだす。下の方から無数の泡が一斉に上がってきて、たちまちその中にとらわれてしまう。キラキラ光を放つ泡でできた壁が周囲を取り囲み視界が失われる。今になって急に溺れそうな気がしてくる。水の中にいるのだから呼吸できないはずだと気づいてしまったからだ。泡の中には空気があるはずだ、泡を口に含めば何とかなるのではないか。そう思って泡の壁に近づく。都合良く大きな泡ばかりだ。と思うとその泡の中に何かがある。見ると自分と彼女だ。どの泡の中でも二人は身を寄せ合っている。手を伸ばすと泡が割れ、二人の声が一瞬間こえる。

一つの泡の中で自分は彼女に身を寄せて立っている。別な泡の中では自分は背後から彼女を抱きしめ、まさぐるように胸元に手を置いている。その泡に手を伸ばすと「あ」という彼女の声が聞こえる。別な泡の中では既に女は横たわり、男が衣服をはぎとろうとしている。嫉妬を覚えて暴れ回るとたくさんの泡が割れ、「だめ」「ふうっ」「そこは」「こんなに」「ん」「ほら」「いや」「すごいよ」「はずかしい」と男女のむつみ合う声と息づかいや喘ぎが順不同に溢れ出してくる。そうするうちにも身体は上へ上へと浮かんでしまう。止めなければ止めなければと潜ろうとするがうまく潜れない。彼女に手を伸ばしながらどんどん高みへと連れ去られ、気がつくと泡は既になく、そこには雲が流れている。

女の歓喜の声を微かに聞いたような気もするが、それは眼下を群れ飛ぶ白い海鳥の鳴き声だったかもしれない。高みへ高みへ。身体は引き上げられて行き、再び空気のないところへと運ばれて行く。海はやがて雲の向こうにくっきりした青を見せるようになり、それを縁取るように見えてきたのはどこかの大陸だ。自分が巨大な球体を見下ろしていることが感じられるようになった頃、地球の輪郭が見えてくる。輪郭の外には遙かな深淵が口を開けている。惑星の外に出てしまったのだな、真空の空間にいるのだなと思った時に、不意にそこが音楽に満たされていることに気づく。

大きな泡のように見える地球の中で、自分が彼女と愛し合っている。自分は自分以外の誰でも

あるし、彼女は自分であり、ほかの誰でもある。父であり母であり妻であり息子であり友人であり知らない誰かであり回遊魚でありカイツブリであり野良猫でありらくだでありクジラでありスフィンクスでありピラミッドであり万里の長城であり国家であり法律であり犯罪であり善行であり風であり光であり生であり死でありナスカの地上絵であり絵画であり演劇であり音楽であり詩である。

鳴り響く音楽と詩に満たされながら、あと少しだ、あと少しで何かがわかる、と思うが、そこでゆっくりと目を覚ましてしまう。

「おしぼり、いかがですか？」

夢の中の女に似た女が話しかけてくる。身を起こし、彼女を見つめ、それが新入りのバーテンダーだと気づくのに少し時間がかかる。

「もう少しで見つかりそうだったんだ」

「はい」何もかもわかっているような微笑みを浮かべ、バーテンダーの女性がチェーサーの水を差し出してくれる。「見つかりそうだったのなら、もう見つかったのと同じことです」

「見つかったのと同じこと？」

「と、マスターが言ってました。ですから」

メニューに目を落として今飲んだカクテルの名前を探し出した私からメニューを取り上げて彼女は言う。

「『詩人の恋』は一晩に一杯だけ。飲む前の約束ですよ？」

(「詩人の恋」 ordered by カウチ犬--san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

うたかたの恋

<http://p.booklog.jp/book/41899>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41899>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41899>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.